



日本頭痛学会「慢性頭痛の診療ガイドライン 市民版」作成小委員会：編

慢性頭痛の診療ガイドライン 市民版

評者

大生 定義（立教大学社会学部教授/立教学院診療所所長）

●頭痛診療をスキルアップしたい非専門医にも役立つ

日本頭痛学会「慢性頭痛の診療ガイドライン 市民版」作成小委員会（委員長：立岡良久先生）編集による『慢性頭痛の診療ガイドライン 市民版』が医学書院より上梓された。これは同学会と日本神経学会が共同でまとめた、頭痛診療医向けの『慢性頭痛の診療ガイドライン 2013』を患者向けに要約・編集したもので、本来の出版目的は患者への啓発用ということであろう。この目的には大変有用であり、患者が個人で読み、理解するには役立つであろうし、さらに診察室内での説明用、待合室に備えつけとしても使える本である。しかし、あらためて読ませていただくと、患者のみならず、頭痛診療を見直し、スキルアップを考えている非専門医にも役立つ内容にもなっており、この点の活用も十分重要と思われる。患者・医師両者に向けてご推薦したいと思ふ筆を執った。

本書の特徴は第1に記述が簡潔で簡明明瞭である。テーマに対する答えが短く、時間がない時も一瞥するだけで

答えが得られる。第2にはサイドメモが充実している。ここで頭痛のバリエーションやさらなる情報の入手先がわかる。第3にあくまでも質問から出発している構成になっていることである。医師であれば、すぐに読了できる量と内容である。第4に『慢性頭痛の診療ガイドライン 2013』以後に発表された、最新の頭痛分類（国際頭痛分類第3版 beta 版）に準拠していることである。

第3の特徴である、質問形式であることは、患者への説明場面に大変便利である。特に目次と本文の間に「パブリックエスチョン（よくある質問）」を4ページ割いて示している。患者とかかりつけ医との間での会話を彷彿とさせる身近な疑問で、ここから関連する本文のクリニカルエスチョンとその回答と解説（ほぼ1ページあるいは見開き2ページ程度）に飛べるようになっている。

以前評者は片頭痛患者が医療に何を望むかを調査したことがある。すると患者は、痛みの軽減よりも大切なものとして、頭痛をきちんとみとめる医



師がいること、薬の説明をきちんと受けられること、痛みの原因をきちんと説明してくれることを挙げていた。この本が患者へのコミュニケーションのツールとして活用されればと願う。本書を活用すると、頭痛患者の説明してほしいことに対する的確な回答を直ちに示すことができる。先進的な患者はそうではないかもしれないが、一般の患者が自分で読むには少し難しい内容もある。しかしこの本を仲立ちにして患者・医師の成長や信頼関係の確立・維持もできるのではないかと考える。

医療の均てん化の促進も叫ばれている。総合診療医のあり方も議論されている。「頭痛診療には無関心」でも、「専門医に任せてばかり」でもないいい社会の要請もある。患者の痛みや生活に対する影響の認識、適切な診療を進めていく上で、本書は患者・非専門医双方に役立つものと確信する。

A5 頁156 2014年
定価：本体1,800円＋税
[ISBN978-4-260-02059-6] 医学書院刊